



令和4年度県南ブックコミュニティ交流学習会

県南各地域で活動する読み聞かせボランティア団体の集まりである「県南ブックコミュニティ」主催の交流学習会が、6月26日に横手市勤労者総合福祉センター「サンサン横手」で開催されました。

前半の全体学習会では、選書について講話、絵本『びゅんびゅんごまがまわったら』を用いた読み聞かせ演示によって、参加者全員で読み聞かせでの留意点や身に付けるべきスキルなどを共有しました。

後半は、①「今さら聞けない基本の基」②「扱いにくい本、扱っておきたい本」③「お話し会プログラム」の3つのテーマでグループ別学習会が行われました。一人一人のニーズに合った充実した学習の機会となったことが参加者の方々の感想から伺えました。

コロナ禍、ウクライナ戦争等のニュースは、子どもたちはなおのこと、私たちの心に暗い影を落としています。このような状況であるからこそ、子どもたちの心を育み、本を通して人と人がつながる読み聞かせをはじめとした読書活動の取組は、絶やしてはいけない希望の灯火となっていることをあらためて感じました。



つながり、広げる読書の輪

読書活動推進に関わる取組が、至るところで静かな情熱をもって進められています。

まずは、学校図書館の取組をご紹介します。



大曲中学校では、図書委員会が中心となって図書館の環境作りに励んでいました。



桧木内小学校では、上級生がおすすめの本を選んで下級生に紹介していました。

児童が作成したポップでも本の魅力を紹介。



続いて、公立図書館での取組をご紹介します。



西仙北図書館では、梅雨の季節に合わせたテーマ展示コーナーがありました。



神岡図書館のくつろぎスペースは、幼児向けの本と高齢者向けの本が隣接されているのがポイント。

最後に、読み聞かせの活動の様子です。



6/16放課後支援者研修会（大仙会場）での読み聞かせワークショップ



6/19湯沢市家庭教育支援チーム「和輪人」と「みんなの森」のコラボ企画

アドバイザーコラム：学校・家庭・地域の連携・協働 20

進化する「ふるさと教育」④

社会教育アドバイザー 小笠原 重夫

前回の本コラムで、羽後高校と羽後中学校が、地元の商店等と連携して新たな商品を生み出した例を紹介しましたが、最近、ふるさと教育やキャリア教育の一環として、地元企業等と連携しながらこのような‘コラボ商品’の開発にチャレンジする学校が、確かに増えています。

筆者がここ何年かで見聞きしたコラボ商品だけでも、「6次化まんじゅう『十文字物語』(十文字小)」「あんべいいなチャーハン(生保内小)」「曲中りんごポート(大曲中)」「みそマカロン(角館高)」「夢かなエールギフト(稲川中)」「サワの素(湯沢翔北高)」等々があります。

中には、「稲中カンパニー(稲川中)」のように模擬会社と思えるような生徒による組織を立ち上げ、地域の特産品を使ったオリジナル商品開発、

製造、販売に取り組んでいる学校もあります。

これらの取組には、地元企業側からすると、若者のみずみずしい視点や発想を取り入れて、自社に少しでも変化をもたらしたいという思いと、学校側からすると、授業を通じて人口減少などの地域が抱える問題を見つけ、持続可能な地域とするために地域の活性化に寄与したいという思いをマッチングさせた、いわゆる‘ウィンウィンの関係’がしっかりとできあがっています。

ですから、これらの取組は、「地域学校協働活動」の典型といえるでしょう。

学校が、このような実践的な学習を通して地元企業等との繋がりを深めることができれば、本県の大きな課題となっている若者の県外流出の歯止めに繋がる可能性があるように思えてなりません。